

「盆土産」(三浦哲郎) 教材研究のための覚え書き

黒田 俊太郎・幾田 伸司

一 はじめに

「盆土産」は、東京に出稼ぎに行っている父親がえびフライを土産に帰省した盆の二日間の出来事を、祖母や姉と山村に残る小学三年生の主人公を視点人物として描いた短編小説である。中学校教材としての初出は、一九八七年度版の光村図書『国語2』で、一九九三年度版でいったん採録が中断した後、二〇〇六年度版から同社の『国語2』に再掲載された。以後、現行の二〇一六年度版まで継続採録されている。

教材としての「盆土産」は、父の土産であるえびフライをめぐって展開する家族の温かい交流を描いた物語として読まれることが多い。現行版教科書では、「関わりの中で」という單元内に向田邦子「字のない葉書」とともに置かれており、目標の一つには、「作品に描かれている優しさや温かさなどを、表現に即して読み味わう」が掲げられている。単元名や目標が示唆するように、お互いを思い合い、亡くなった母親や祖父にも心を配る主人公や家族の「優しさや温かさ」が、教室でこの作品を読み進める際の軸として設定されている。

しかし、「盆土産」には、社会状況の中での地方の一家族の姿、

都会と田舎の対比、生者が死者に向ける思いなど、父と家族との交流に収まりきれないいくつもの話題が伏在し、えびフライをめぐる物語を支えている。また、小学三年生の子供の一人称のように見えるこの物語の語りについても、「語り手」という視座から分析し直す必要がある。そこで本稿では、先行研究を踏まえた上で、教材研究や授業実践に応用できるいくつかの分析観点に基づいて、「盆土産」の読みを提案したい。

「盆土産」に関する授業実践報告・授業構想案・教材研究論を総覧し、研究史を構想するとき、画期をなすと考える二つの論文がある。一つは、和田悦子「三浦哲郎短篇小説論―出稼ぎものにおける崩壊の構図」であり、もう一つは、加藤郁夫「「盆土産」(三浦哲郎)を読む―一層に重なる物語」である。

ただし、和田論文は、題目に「盆土産」の文字がないせいか、全くと言っていいくらいに等閑視されてきた。また「語り」の問題にいち早く棹さした加藤論文も、十分検討されてきたとは言い難い^(注2)。そこで本稿は、これらの論文の重要性を改めて指摘するとともに、それぞれの問題意識に基づき若干の考察を加えてみたい。次節ではまず、加藤論文を検討する。

二 「語り」の問題

「盆土産」の物語世界の時間・場所は、一九六〇年代半ばの東北地方である。「祖母と、姉と、三人で」（「私の」のような表現が省略されている）といった記述から、語り手自身が視点人物である限定視点の一人称小説であることが分かるが、全篇にわたり一人称の主語は一度も出てこない。このような省略の徹底化により、語り手の実態は語り手自身により曖昧にされているわけだが、その一方で語り手が、「ゆうべ、いきなり速達で盆には帰ると言ってくるのだから、面くらってしまふ」などと、出来事をほぼリアルタイムに語っていくことで、語りの現在は一九六〇年代半ばであるかのように装われる。

そして、これら語り手が仕掛けた装置により、「語り手Ⅱ小学三年生の子供」と、読者は錯覚させられていくのである。

加藤は、そうした語り手Ⅱ「小三の息子」という凶式は不正確であり、「小三の息子の背後に」、「大人になった息子」という「もう一人の語り手の存在が想定できる。つまり、「盆土産」の語りは二層になっている」と指摘している。^(注1) 姉や近所の一級上の喜作が父親のことを「父っちゃ」と呼称しており、「小三の息子」も「父っちゃ」と呼んでいたはずだが、地の文では「父親」という呼称が用いられている。そうした地の文/会話における呼称の使い分けが行われるのは、「語り」の「二層化」が原因であるとするのである。^(注2)

その上で加藤は、「大人の息子は小三の息子には見えなかつ

た、いや知るすべすらなかつたことを知っている」とし、それぞれの場面では、「小三の息子の目に映るほのぼのとした家族の温かい姿」／「大人の目に映る家族の姿」という「二層に重なる物語」が浮上するとしている。^(注3)

えびフライ、とつぶやいてみた。

加藤の「二層に重なる物語」という発想を踏まえると、例えば右のような冒頭部分も、単に「小三の息子」のつぶやきと解釈するだけでは十分ではない。むしろ、引用符がないことが直接話法ではないことの根拠にはならないものの、えびフライというつぶやきを、少年の発話であると限定する意志が語り手にあったのならば、引用符を付した方が解りやすくなつたはずだ。一方、これを地の文の「大人になった息子」によるつぶやきでもあるとする場合、未来（語りの現在）において、何らかの出来事を契機にえびフライのエピソードを想起し、感慨深げにえびフライとつぶやいて回想に入っていく場面とすることもできる。

このように、加藤の「二層に重なる物語」という発想を導入し、各場面を常に両義的に解釈していくような実践も構想できらう。

三 〈小三の娘／大人になった娘〉として読む可能性

ここでは、こうした複層的な読みの実践のために、さらにもう一つの提案をしてみた。

すなわち、「盆土産」における「語り」の「二層化」という事態は、加藤のいうように〈小三の息子／大人になった息子〉という位相だけでなく、語り手の性別をめぐる位相でも起こっているのではないかというのである。

語り手を男性とする根拠は本文には何一つなく、ここでも語り手の実態が極めて意識的に曖昧にされているのだが、そのことを指摘した先行研究は管見の限り存在しない。一九八七年度版の初出以来、教科書には視点人物を男子とする挿絵が施されてきたが、教科書以外ではそうした解釈行為を含む挿絵は施されてこなかった。

「盆土産」は本来、語り手の性別の両義性という〈二層化〉を招来するテキストであり、作家三浦哲郎もまた、男性読者／女性読者に共感してもらえよう、語り手の存在を敢えてほかしたのかもれない。にもかかわらず、教科書に施された挿絵は、語り手を〈小三の娘／大人になった娘〉として読む可能性を阻害しているのである。

総理府青少年局（一九六七）は、秋田県島海村・西目村・仙北郡中仙町（いずれも当時）の出稼ぎ家庭の子どもたち（小四～中三）の作文（テーマ「お父さん」約五千篇を分析し、「小中学生、男子と女子とでは、そこに描かれている父親の像に、

大きな違いが見られる」としている。藤原良毅（一九六五）も、秋田県仙北郡千畑村（当時）の出稼ぎ家庭の子どもたち（小・中）一二四名に対するアンケート調査に基づき、例えば、小学生男子では家族員の出稼ぎについて、賛成二・反対一〇、だったというのに対し、小学生女子では、賛成二・反対一〇、だったというようなデータを積み重ね、やはり小、中学生、男子、女子とで顕著な差が見られる項目があるとしている。

こうしたデータは、男子／女子の性格を本質化する危険性をはらむ一方、父親や出稼ぎに対する子どもたちの思いは、六〇年代の東北という地域社会に根ざしたジェンダー構成に基づく顕著な傾向性があったことを物語る。もつともこうしたデータに依拠するまでもなく、語り手が女性であるとした場合、起こりうるニュアンスの変化を、やはり両義的に解釈していくような実践を構想できる。例えば、姉との小競り合いの場面は、姉弟／姉妹とで意味合いは異なってくるであろうし、また最後の父親が「こちらの頭をわしづかみ」にする場面なども、性別が意識的に曖昧化された「こちら」という存在の性別如何で、趣は全く異なってくるであろう。

今後は、〈四層に重なる物語〉という発想を取り入れた読みを模索することもできるのではないだろうか。
次節では、和田論文を検討する。

四 〈出稼ぎもの〉という視座（パースペクティブ）

加藤は、先程も引用したように、「大人の息子は小三の息子には見えなかった」「未来」を「知っている」とし、その上で、「父親が東京での仕事をやめて家族のもとに戻ってくる、そのような日は来なかったであろう」と、「盆土産」を「家族崩壊の予兆の物語」としている。^(注7)

だがそうした読み自体は、和田論文がすでに、「東京と地方」とに別れて暮らす父親と子供との文化的、心理的な距離を子供を通して描き、その距離がいずれ家族関係そのものの崩壊を暗示させる内容になっている」として提示していたものだった。

和田が作品分析に導入したのは、〈出稼ぎもの〉という視座である。和田によれば、三浦哲郎には〈出稼ぎ〉をモチーフにした、「蜂」(『文學界』一九六五・一)から「休猟区にて」(『すばる』一九八〇・五)に至る一八もの作品群があり、「盆土産」はその最も後期に属す一七作品目にあたる。さらにそれらは、Ⅰ〈出稼ぎ〉を取り巻く外部的状況に焦点をあてた作品群と、Ⅱ〈出稼ぎ〉によって変わっていく、出稼ぎ者自身の内面に焦点を当てた作品群」とに分類できるとい^(注8)う。

一八作品中で描かれる家族は、それぞれ別々の家族だが、〈出稼ぎもの〉という視座を導入した場合、ⅠとⅡの作品群は相互補完関係に置かれ、例えば「盆土産」で描かれなかった父親の心情を、Ⅱの作品群の登場人物の心情を代入して想像するとい

うような読書行為が成立するだろう。

和田は同じように、「盆土産」に描かれなかった「未来」は、やはりすでに発表されていた一六作品が描いており、補完する関係にあると主張する。補われるのは全て、「〈出稼ぎ〉によって離れ離れになってしまった家族の心、都市の文化や価値に染まっていく父親、父親の変化に怯える子供の不安な心、村に残される妻、親を奪われ捨てられた子供らの悲劇、都市にも居場所を見いだせず、かといつてもはや村の生活にも戻ることが出来ない出稼ぎ労働者の疎外感」といった〈崩壊する未来〉ばかりである。

労働力を必要とする都市のエネルギーと、一九六一年に制定された農業基本法に促された止むにやまれぬ離農のエネルギーとが重なり、出稼ぎ労働者の数は、一九六五年頃には統計データを超える百万人に達したとい^(注9)う。「盆土産」の家族も農地を失い、父親は出稼ぎが恒常化した「専業出稼ぎ」となっている。また「うさぎの毛皮の防寒帽」や「麦わら帽」しか被らなかつた父親が、「まだ頭になじんでいな」い「ハンチング」を被つて帰郷する姿は、「都市の文化や価値に染まっていく」道程を示唆しているようでもあり、他ならぬ「えびフライ」もまた、〈崩壊〉につながる「都市の文化や価値」の象徴に映じられる。そう考えると、冒頭で、えびフライとつぶやく大人になった息子／娘の感慨の内実も、より鮮やかなものとしてイメージできる。このように、〈出稼ぎもの〉という視座を積極的に導入した場合、「盆土産」に描かれなかった部分を、他の〈出稼ぎもの〉

よって補完することで、一個の完成した物語のイメージを獲得することが可能となる。こうした読みのメリットは「わかつてらあに。また買ってくるすけ……」と言った父親が帰って来ないという「未来」を全く想像しない読者に、「崩壊する未来」という一つの解釈の可能性を提供してくれることだろう。「盆土産」に教科書で接した現代の中学二年生の多くがそうした読者だとすれば、「出稼ぎもの」という視座の導入は、その意味で極めて有効に機能すると考えられる。

ただし、そうした読書行為は、取りも直さず、三浦哲郎文学という体系の中に作品を位置づけようとする作家論的な読みと他ならず、「崩壊する未来」以外の解釈を斥けたいという欲望と隣接している。すなわち、「盆土産」の多様な解釈の可能性を狭めてしまうというデメリットも内包されているということだ。

「盆土産」を読む際、こうしたデメリットも意識した上で、「出稼ぎもの」という視座を取り入れ、出稼ぎをめぐる同時代状況のイメージを補足するような実践を構想することが望まれる。そのような〈悲劇〉は物語の中だけの出来事ではなく、現実^(注12)に起こっていたことでもあるからだ。

五 「えびフライ」の意味づけ

「盆土産」のストーリーの軸となり、登場人物をつなぐ核となっているのが「えびフライ」である。物語は、「えびフライ、

とつぶやいてみた」という主人公の行為の叙述から始まる。これは、結末の父との別れの場面で、主人公が「んだら、さいなら、と言うつもりで、うっかり、『えんびフライ。』と言ってしまった」ことと呼応する。それゆえ、物語の首尾に登場する「えびフライ」と「えんびフライ」との違いを読み解くことが、物語を読み進める際の手がかりの一つになる。これを踏まえて、教科書の「学習の手引き」でも、「作品中には、「えびフライ」「えんびフライ」という語が繰り返して出てくる。それぞれ話のどのような心情が込められているか考えよう」という課題が設定されている。この課題では、主人公の「えびフライ」の捉え方が、「気になってしかたない」「楽しみ」な父の土産から、「ただの珍しい食べ物以上の意味」を持ち、「家族全員が喜びを分かち合うことのできる（中略）さらにすばらしい土産」となり、「父の愛情そのものの象徴」へと変わっていくことを、学習者は読み取っていくことになる^(注13)。

「盆土産」の中で「えびフライ」の持つ意味が変容していくことは確かであるが、父との別れに際して主人公が言った「えんびフライ」に主人公の思いが読み取れるかについては、異論もある。昌子佳広は、「えんびフライ」が「うっかり」出てしまった言葉であるならば「『えんびフライ』と言ったのに意図などなかった」のであり、この言葉に「『どういう気持ちで込められているか』という問いは成立しない」と指摘している（昌子（二〇一一）、一四ページ）。他方、野中潤は、主人公は「自分でもなぜ『えびフライ』^{マッポ}と言ってしまったのか、よくわかって

いない」としたうえで、「そういう少年の気持ちをも、可能な限り読み取ろうとした時に何が見えてくるのか」と問いかけて、言葉にならない主人公の内面を讀者が意味づけることが、この場面を読む際の観点になると捉えている（野中（二〇一七）、七九頁）。このように、この場面から「えびフライ」に込められた主人公の心情を読むべきかは、論者によって異なる。確かなのは、父をバス停まで送る道すがら、主人公はえびフライを話題にしなかったということである。

「こんだ正月に帰るすけ、もつとゆつくり」という父の言葉聞いてしゃくり上げそうになった主人公は、「冬だから、ドライアイスもいらねべな」と言う。とつさに「ドライアイスもいらねべな」という言葉が口に出るのだから、このときの主人公はえびフライのことが心にあつたはずである。最後に「えんびフライ」と「うっかり」「言ってしまった」という表現からも、主人公がえびフライのことを気にかけていたことが窺えるだろう。それなのに、なぜ主人公はえびフライの話題に触れようとしなかったのか。

状況を考えれば、土産をねだるのが恥ずかしかつた、えびフライが滅多に手に入らない高価なものなので言い出しにくかつた、父との別れの悲しさの方が強くえびフライのことを言う気になれなかつた、といった主人公の内面を想像することができるところが、父が次の帰省でも土産にえびフライを持ち帰ることを期待している主人公の思いは「ドライアイスもいらねべな」という言葉に透けて見えている。ドライアイスと言ってし

まったからには、えびフライを買ってきてほしいという主人公の気持ちは、父に伝わってしまったている。しかし、その後でも主人公はかたくなに黙っているのである。野中は、最後に「えんびフライ」と言ってしまった主人公の内面について、「もう一度えびフライを買ってきてほしいという食欲や物欲だけではないだろうし、父親との別離の寂しさということだけでもないはずなのである」として、次のように解釈している。

墓参りをした直後であることを考えれば、混乱した少年の頭の中には、「早死にした母親」に対する愛着の気持ちや死者のためのえびフライを食べてしまったことに対する何らかの心理が底流していると思われる。そもそも父親が盆土産のためにえびフライを持って帰省してきたのは、死者に会うためであったのだということに対する気付きや、そういう気付きの向こう側に父親の喪失感を感じている少年の姿が描出されていると考えることもできる。それは、死者のことを忘れてえびフライを食べてしまったことに對するうしろめたさのような心理だったと言つてよいかもしいれない。もちろんここで言う「うしろめたさ」とは、小学校三年生の少年が明瞭に意識しているものというよりも、心の深層にうつすらとあるというぐらゐのものである。

（野中（二〇一七）、八〇頁）

野中は、「うしろめたさ」は「心の深層にうつすらとあるぐ

らしいものである」と捉えているが、主人公が意図的にえびフライの話題を避けたのであれば、「えびフライ」を買ってきてもらうこと、それを食べることに對するうしろめたさは主人公の内面で意識されていたと読めるだろう。えびフライが死者への供物であるという認識を三年生の主人公が持ったとまではいえないが、死者たちへの気遣いは子どもなりに感じていたと考えられる。あるいは、「父親の喪失感」を主人公が感受しているのであれば、「えびフライ」を話題にしなかったのは父への気遣いだったと考えることもできる。いずれにしてもえびフライは、すでに父の愛情の温かさや家族のつながりの象徴というだけでなく、なにがしかの痛みをもたらすものとして主人公に認識されている。

バス停までの道中に焦点を当てるのであれば、このときの父親の思案を想像することもできるだろう。主人公がえびフライに對してうしろめたさや葛藤を感じていることを、父親は知らない。えびフライを買ってきてほしいのにそう言わない子供に對して親が感じるのは、家族や自分に対するその子の気遣いや優しさではないか。だから、父親は次もえびフライを買ってきてあげたいと思うのだろうが、主人公はそれを全面的には望んでいない。この時すでに父親と主人公の思いはすれ違っているのだ。結末の「えんぴフライ」をめぐるやりとりは、そうしたすれ違いが顕在化したものである。

六 「えんぴフライ」へのこだわり

えびフライを食べることに主人公がうしろめたさを感じたことは、墓参りの場面で語られている。

祖母は歯がないから、言葉はたいがい不明瞭だが、そのときは確かに、えびフライではなくえんぴフライという言葉葉を漏らしたのだ。

祖母は昨夜の食卓の様子を（えびのしっぽが喉につかえたことは抜きにして）祖父と母親に報告しているのだろうかと思つた。そういえば、祖父や母親は生きているうちにえびのフライなど食つたことがあつたらうか、（中略）そんなことを考えているうちに、なんとなく墓を上目でしか見られなくなった。

えびフライは、主人公に小さな幸福をもたらしてくれたと同時に、その幸福を享受することの罪悪感も呼び寄せてしまっている。このようなうしろめたさを呼び寄せた契機は、祖母の「えんぴフライ」という言葉であつた。ここで注意したいのは、「えんぴフライ」という言葉を聞き取つたのは墓参りをしている主人公だが、「えんぴフライ」という言葉にこだわっているのは、すでに大人になつた語り手だということである。「えびフライではなくえんぴフライ」と語られているように、語り手にとつては、祖母の言葉が「えびフライ」ではなく「えんぴフライ」

であったことこそが重要なのだ。

この場面については、加藤郁夫は次のような解釈を提示している。

その意味(祖母が「えびフライ」でなく「えんびフライ」といったことを問題にすることの意味…稿者注)は、息子には祖母の言葉が「えんびフライ」と聞き取れたということである。自分では『えびフライ』と言っているつもりでも、「えんびフライ」としか発音できない息子(つまり息子は『えび』と『えんび』の音が聞き分けられないのである)が、この場面では祖母の言葉を『えんびフライ』と聞き取ったのである。「えんびフライ」としか発音できない息子が発音の違いを聞き分けたことは何を意味するのだろうか。

「えびフライ」は都会的なものを表すと述べた。「えび」と「えんび」の違いに着目することは、祖母の中にある田舎を見ることがあり、それは自分の中にある田舎性に気づくということである。それは都会志向の裏返しでもある。

(加藤(二〇〇六)、六三―六四ページ)

加藤が言う「えんびフライ」の田舎性を認識しているのは、三年生の主人公ではなく語り手である。したがって、事後的にこの物語を語る(おそらくは大人になった)語り手が「えんびフライ」の田舎性にこだわる理由は何かを考慮することが、語り

手の意図を読むことになる。

たとえば、田舎を出ることなく死んでいった祖父や母親に伝えるには田舎の言葉である「えんびフライ」でなければならなかったことに、語り手はこだわったのだという解釈が考えられる。田舎に入ってきた都会的なものである「えびフライ」は、祖母によって田舎のものである「えんびフライ」に置き換えられている。そのことに語り手はこだわっているのである。

死者や祖母は、「えんびフライ」という言葉の世界で生きる田舎の住人である。「えんびフライ」としか言えない小学三年生の主人公も田舎の住人であり、口にする言葉を田舎性の指標にすれば、雑魚を「ジャッコ」としか言えない姉もまた田舎の住人である。一方、父は「えびフライ」と書き、話し、まだなじんでいないけれどハンチングをかぶって帰ってくる、都会から来た人物として描かれる。その父が都会から持ち帰った「えびフライ」によって、つましいが穏やかな田舎の住人たちの暮らしと、その辛さや苦しさが変わっていく。このとき主人公が感じたいしろめたさは、単に自分たちだけがえびフライを食べたことについてだけでなく、祖父や母親が生きていたときには手に入らなかった都会的なものから幸せを享受したことについての感情もはらんでいる。おいしい思いをしたことに対するうしろめたさを意識しているのは主人公だが、都会的なものにうしろめたさを感じるのは、田舎性にこだわっている語り手なのである。

祖母が「えんびフライ」と言ったことは、「えんびフライ」

という田舎性が、このときはまだ都会的な「えびフライ」に侵されずに残されていた(言い換えられていなかった)というところである。語り手は、そうした田舎性の残存を取り立てて語っているのであり、そうした語りからは語り手が田舎性を失ってしまったことが想像される。田舎性の喪失とは、幸福な子ども時代が終わったことかもしれないし、故郷が変質したこともかもしれない。語り手が「えんびフライ」にこだわるのは、そこに田舎が残っていたからであり、それは都会化と田舎の喪失による痛みを喚起する。この失われた「田舎」は、故郷や家族と言い換えられるかもしれない。「優しさと温かさ」に満ちた幸福な少年時代の記憶は、その喪失の痛みの記憶も伴っている。そうした視座も、この教材を分析する際の観点として必要である。

七 おわりに

語り手は近年の物語教材の分析で重視される観点の一つであり、「盆土産」の教材研究も「大人になった語り手」が小学三年生の盆の出来事をどう捉えているかをめぐって論じられてきた。本稿では、先行研究で提示された語り手の想定を広げ、冒頭で「えびフライ」とつぶやいた語り手の主体や、語り手の性別についても多義的であることを指摘した。また、「出稼ぎ物」という作品群から示唆される主題を読み込むことで〈崩壊する未来〉といった解釈も示した。

さらに、父をバス停に送る道中の登場人物の内面を起点とし

て、主人公は「えびフライ」をうしろめたさや痛みを感じさせるものとしても認識していたという解釈を示した。そうしたうしろめたさや痛みは「えんびフライ」に象徴される田舎性を語り手が失ったことから生まれている。語り手が、祖母の「えんびフライ」という言葉にこだわることは、語り手の田舎性の喪失が示唆される。

語り手を想定し、なぜそのように語ったかを検討することや、語られていない時空間を読み込むことは、叙述に即しながら書かれていないことを補い、広げる読みの方法である。教材分析においては、こうした観点も、物語テキストの多様な読みを引き出すことに有効に機能すると稿者たちは考えている。

注

(1) 本稿では、物語本編に登場する小学校三年生の子供を「主人公」と呼ぶ。先行研究が示すとおり、事後的にこの物語を語る「語り手」と「主人公」は区別されなければならない。また、この子供が男児だという叙述も本編にはないため、「少年」という呼称も避けた。

(2) 昌子佳広は、「語り」の問題が「盆土産」の教材化において重要な位置を占める」とした上で、「先行する実践および授業構想、即ち本稿に先行する教材研究論においても、ほとんど問題にされていない」(昌子(二〇一一)、一四頁)としている。二〇一八年現在でも、そうした状況に変化は見られない。

(3) 加藤郁夫(二〇〇六)、六四頁

(4) 昌子も、「だからこそその「語り」の中には、「少年」の時点では考えもしなかったはずの、父親の目に見えない心遣いに対する感慨とか、少年の発想では必要もないはずの、できごとの裏事情に関する説明だとかが時に入り交じるのである」(昌子(二〇一一)、一五頁)と、加藤のいう「語り」の「二層化」という発想が妥当である根拠をあげている。

(5) 加藤(二〇〇六)、六五頁

(6) 総理府青少年局(一九六七)、一〇〇頁

(7) 加藤(二〇〇六)、六五頁

(8) 和田悦子(一九九七)、六一頁

(9) 和田(一九九七)、六〇頁

(10) 和田(一九九七)、六八頁

(11) 美土路達雄(一九六五)、二九頁

(12) 一九六四年のクリスマス・イブの前日、二月二三日の『読売新聞』夕刊には、「お正月はどこにいる」という見出しの記事が掲載されている。家出した母親、出稼ぎに行つて音信不通の父親を探すため、青森の小学生の三姉妹が上京し、補導された記事だった。警察の調べで父親の居場所はすぐ見つかり、翌一二月二四日、四人は再会し、ともに帰郷している(『お正月みつかる』、『読売新聞』一九六四・二・二四)。ところが直後に父親は病死し、三姉妹は再び孤児になってしまふ(『三姉妹に短い春』、『読売新聞』一九六五・二・一〇)。この三姉妹の境遇・動向はメディアの注目するところとなり、そのかきもあつて母親が見つかるも、生活苦から青森を去り

都会に出るところまでが連日のように報道された。三浦哲郎の〈出稼ぎもの〉の中には、同様の境遇の姉弟を描いた「付添い」(『波』一九七九・三)がある。

(13) 光村図書(二〇一六)、三二七―三二八頁

【引用・参考文献】

加藤郁夫(二〇〇六)『盆土産』(三浦哲郎)を読む―二層に重なる物語、『月刊国語教育』、三二二、東京法令

昌子佳広(二〇一一)『文学教材「盆土産」(三浦哲郎)の教材研究―「語り」の問題とその教材性』、『茨城大学教育学部紀要(教育科学)』、六〇

総理府青少年局(一九六七)『出稼ぎの実態と子どもへの影響に関する研究(青少年問題調査報告書)』、四一―三

野中潤(二〇一七)『教材としての「盆土産」(三浦哲郎)』、『国文学論考』、五三、都留文科大文学部国語国文学会

藤原良毅(一九六五)『出稼ぎ家庭の子どもたち』、『青少年問題』、一二(五)、青少年問題研究会

光村図書(二〇一六)『中学校国語 学習指導書 二上』

美土路達雄(一九六五)『出稼ぎ 農村はどこへ行く』、日本経済新聞社

済新聞社

和田悦子(一九九七)『三浦哲郎短篇小説論―出稼ぎものにおける崩壊の構図』、『文月』、二、文月刊行会

(くらだ しゅんたろう・本学教員)
(いくた しんじ・本学教員)